

実践

# 畑の作業 12ヵ月 ②

## 2月の作業

### 実践

#### ① ネットを張る

エンドウネットやキュウリネットを用意する。支柱を立ててネットを張る。支柱の間隔は狭い方が丈夫。



3～4月につるが伸びてきたら誘引する。

#### ② 果菜類のタネまき

セルトレイなどにトマト、ナス、ピーマンのタネをまき、加温して発芽させる。発芽して約1ヵ月で本葉が2～3枚になるので、ポットに移植して育てる。



5月の大型連休のころに定植する。

#### 「そのほかの作業」

春作ジャガイモを植え付ける。

## 2月の作業

### 実践1

## エンドウの分枝に日光を当てる

# エンドウのネット張り & 果菜類のタネまき

エンドウやソラマメが本格的に生育を始めるのは3月に入ってから。3月上旬の作業でも間にありますが、支柱を立てたり、ネットを張ったりする準備や作業を前もって進めておきましょう。また、トマトやナスなど果菜類をタネから育てる場合、2月ごろからタネまきして苗作りをスタートします。



収穫間近のエンドウ。かなりの重量がネットにかかるので、しっかりとネットを張っておくことが重要。

昨年10～11月にタネまきしたエンドウが生育を始め、栽培管理をする時期が近づいています。エンドウはつる性の野菜で、支柱やほかの植物に巻き付いて生長します。株の高さは、高性種で150～250cm、矮性種では約100cmまでになります。そこで、春を迎えて生育が始まる3月上旬までに支柱を立てる、ネットを張るなどの作業を行います。

エンドウは1株から10～30本の分枝が出て、この分枝に開花・結実します。たくさん収穫するには、それぞれの分枝の受光態勢をよくして、生産能力を高める必要があります。分枝に日光をよく当てるためには、ネットにまんべんなく誘引することが大切です。密植にならないよう注意しましょう。

エンドウは用途別に、未成熟の種子を食べる実エンドウ（グリーンピース）と未成熟の種子を太らす前に莢ごと食べるサヤエンドウ（絹莢品種と大莢品種）、さらにサヤエンドウで種子を大きく太らせて莢ごと食べるスナップエンドウの3種類があります。いずれの種類も栽培方法は同じでネットや支柱を必要とします。

## エンドウのルーツは？

古代エジプト王ツタンカーメンの陵墓を発掘した際に見つかった副葬品の中にエンドウマメがありました。3000年以上も昔のマメは無事に発芽し、花や莢は紫、マメは茶色というエンドウは今も栽培されています。また、遺伝でメンデルの法則を説明するのにエンドウが使われました。

このようなエンドウの原産地はコーカサス、ペルシャ、中央アジア、中近東などの諸説があるそうです。日本には中国を経て渡来しましたが、その年代ははっきりしていません。現在栽培されている品種は、明治時代に欧米から導入された優秀な多数の品種がもとになっています。



スナップエンドウ「グルメ」



開発 基良

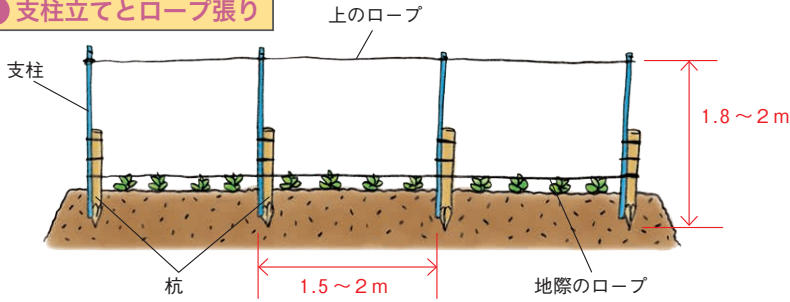
1950年神戸市生まれ。京都工芸繊維大学養蚕学科卒業後、岐阜県蚕業試験場勤務を経て、大阪府高等学校教諭となり、府立城山高校、府立園芸高校で果樹、野菜を担当。現在、大阪府豊中市の花とみどりの相談所相談員。

# ネットの張り方

使用するネットはエンドウネットまたはキュウリネットです。

支柱を立て、支柱の上部と下部の地際にロープを張ります。ネットを上部のロープに通し、続いて地際のロープに通してからカーテンを広げるようにして、緩まないように張ります。間隔は狭い方が丈夫なので、私は杭を打って支柱をしっかりと固定し、ネットを張った後、支柱の間にさらに支柱を追加で立てて補強をしています。

## 1 支柱立てとロープ張り



最初に、1.5～2m間隔に、長さ1.8～2mの支柱を立てる。支柱の間隔は広くとりすぎると、エンドウが生長した時に重みでネットが傾いたり下がったりする。次に、支柱の上部と地際にロープを張る。ネット付属のロープかハウスバンド（ビニールハウスの屋根ビ

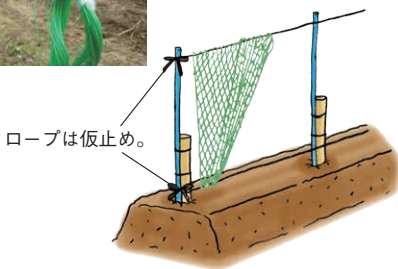
ニールを固定するロープ）のような伸びないタイプを使う。短いロープをつないだものだと、ネットを広げる際に結び目が引っかかるので、つなぎ目のない方がスムーズに作業できる。上下ともロープの片側の端は、ネットを通すことができるように仮止めしておく。

## 2 ねじれないようネット張り

ネットの両端は解けないようひもでしばられ輪になっている。輪のまま、①で仮止めしておいたロープのうち上部のロープを通す。通ったら、ひもを外しネットを少し広げる。ネットがねじれていないことを確認してから、地際のロープを下部のネットの輪に通す。下部のネットをしばってあるひもを外し、カーテンを引くようにネットを広げる。



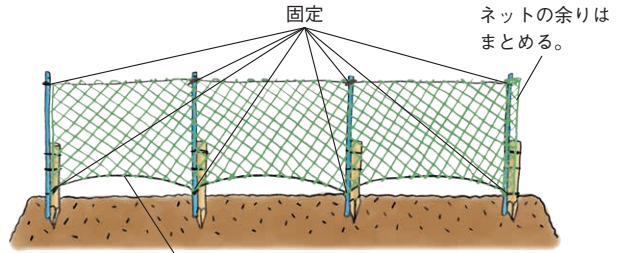
ネットは解かず  
にロープに通す。



ロープは仮止め。

## 3 ネットの固定

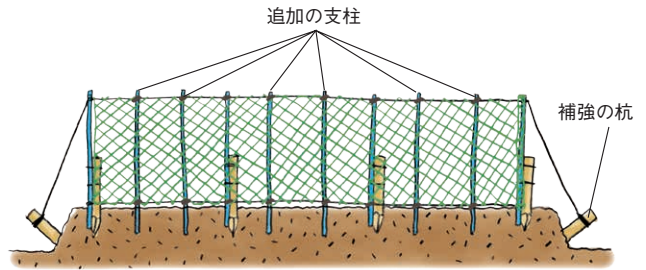
ネットを緩まないよう広げ、すべての支柱にひもなどで固定。余りのネットがあれば端の支柱にまとめる。ネットを強く張りすぎると下端が浮き上がるので注意しよう。



強く張りすぎると浮き上がる。

## 4 支柱を追加して補強

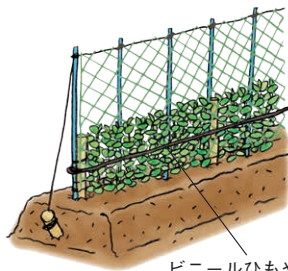
補強のため、支柱の間にさらに1～2本の支柱を追加し、上下をロープにしっかりと固定。追加の支柱は多く入れる方が丈夫。エンドウが生長するにつれネットに重量がかかるため、両端の支柱の外側に短い杭を打ち、ロープを張り傾かないようにする。これでネット張りは完成！



支柱はすべて上下でネットを固定。

## 5 栽培中：つるの誘引

つるが伸びてくると、つるをネットに誘引するためネットの両側にビニールひもなどを張り、つるが落ちるのを防ぐ。ビニールひもは外側に膨らまないように、いくつかの支柱に固定。ビニールひもは、収穫が終わったら回収する必要があるが、麻ひもなら畑に残しても分解するため、回収しなくてもよい。



ビニールひもや麻ひもでつるをネットに誘引。

## おまけ作業

### ヒヨドリの害を防ごう



ベランダの手すりに張った鳥よけの水糸。止り木として鳥は利用できなくなる。

ネットを張り終えてひと安心。が、もう一仕事。エンドウの葉にギザギザの食い跡があったら、それはヒヨドリがついばんだ跡。冬の間は、キャベツやハクサイ、ブロッコリーの葉を食べに来て、これらがなくなると今度はエンドウの葉を食べに来ます。防鳥ネットを張ればよいのですが、簡単な方法があります。

鳥の目と同じほど、地際から約10cmの高さに釣り糸、タコ糸、水糸などをネットの両側、葉の外側にぐるりと張ります。ヒヨドリはこの糸に警戒して近寄ってきません。

また、ベランダでは、野菜がヒヨドリに食べられたほか、ハトのフン害もありました。そこで、手すりに水糸を張ったところ、ヒヨドリもハトも近寄らなくなりました。一度試してみてください。

## 失敗談

### 最初にきつく張らない！

エンドウのネット張りが完成に近づき、もっとピンと張るようにしようと思い、ネットの上部を引っ張ってきつくしました。そして、支柱の上部を固定してから、しゃがんで地際を固定しようとする、ネットが大きく浮き上がっていることに気づきました。上部ばかりに気をとられていたのです。

結局、固定した所を全部外してネットを緩め、やり直します。最初から強く張りすぎないという教訓を得ました。





## 2月の作業 実践2 果菜類のタネをまいてみる

トマトやナス、ピーマンはキュウリとともに夏野菜の主役です。トマト、ナス、ピーマンはいずれもナス科の野菜で、タネまきから定植までの育苗期間が2カ月以上を要します。このことから、家庭菜園などの少量の栽培では苗を購入して定植した方がお手軽です。しかし、作ってみたい品種の苗が手に入らないなど、思い描いた計画通りにならないことがあります。

そこで、自分でタネから育てて苗を作り菜園に定植する、という方法があります。最初から手塩にかけて育てた野菜に、愛着を感じて収穫することは、新しい楽しみとなるかもしれません。

### 1 タネまき方法

タネをまく日は、定植日から逆算して、トマト約60日前、ナス約80日前、ピーマン約65日前になります。5月の大型連休に定植の場合は、2月中旬～3月中旬ごろになります。まだまだ寒い冬の季節です。

これらの野菜の発芽適温は25℃くらい。2月ごろは気温が20℃に満たない日も多くあり加温しなければ発芽しません。

プロの生産者はビニールハウス内でヒーターの入った園芸マットや温床電熱線などを使って大量の苗を作ります。しかし、家庭菜園では少量の苗を用意するだけでよいので、自作で加温できるものを作るか、あるいは、市販の「愛菜花」(タキイ種苗)などの発芽育苗専用の機器を利用して苗を作ります。

### 2 育苗方法

発芽してからも温度が必要です。生育適温はトマト、ピーマンが20～25℃でナスは20～30℃です。また、明るさが不足すると徒長(茎が軟弱に伸びる)するため、日中は明るい窓際などに置くようにします。室内で管理するためには温度と日光の両方に気をつけるようにします。

約1カ月で本葉が2～3枚となります。セルトレイでは隣の苗と葉が重なりあうようになります。このころ4～5号(直径12～15cm)ポリポットに移植し、定植までのポットで育苗します。



「愛菜花スターターセット」  
培養土と育苗ポットなど必要な道具や土がセットになっている。



「タキイ たねまき培土」  
長期肥効型のタネまき用の土。低温期の育苗にも向いている。

### トマトの場合 果菜類のタネまき・育苗の手順

- 1 タキイの「たねまき培土」を使用する場合、大きめのバットなどに広げて、水を加えて湿らせる。土の湿りが均一になるよう全体をかき混ぜる。
- 2 セルトレイに土を詰めていく。この後で、再び水をかけて、土を湿らせる。
- 3 水が抜けて土が落ち着いたら、タネをまく穴を指で押さえつけていく。
- 4 まき穴にトマトのタネをまいていく。
- 5 まき終わったら、薄めに覆土する。

タネをまいた後の灌水は、上からかける「普通灌水」では小さなタネが流れることがあるので、水を張ったバットの上に置いて底面から吸水させる「底面吸水」をするとよいでしょう。

タネまき後約1カ月で本葉2～3枚になったトマトの苗。次は12～15cmのポリポットに移植して育苗する。